

ラオスの即興的語り歌「ラム」とは何か
—その真髓と地域研究・実践的活動等への応用可能性を探る—

虫明悦生

ラオスには民族ごと、地域ごとに独自の語り歌「ラム」が数多く残されている。ほぼ同じものと考えてよい東北タイの「モーラム」に比べて、外国人やフィールドワーカー等にもそれほど知られていないのは、それが見世物的伝統芸能になっておらず、宣伝されることもなく暮らしの一部としてごく当たり前歌われているからでもあるのだろう。

今回はこのラムの起源や歴史の変遷、演奏形態、歌い手と伴奏者の頭の中のイメージの動きや思考・発想、ラムの座の雰囲気、現地録音音源や映像資料、ケーン等の伴奏楽器の実演もとり混ぜてまずは簡単に紹介する。そして歌い手が何をどう歌っているのか、聞き手は何に感じ、何を盛り上がっているのかといった今回の話の中心テーマに移る。結論から言えば、その内容については、様々な比喻を使った男女の口説き合い、村や地域の自然や歴史、村や個人の境遇、民話・伝説（そのパロディー）、役人への陳情、宣伝・広報、精霊の招き入れや仏教の教え…と実に多岐にわたっている。そして実は、日本を含む他国の歌に比べて非常に情報量の多いこれらの歌詞や具体的表現は、現地の人々が自分の周りの世界をどう見聞きし感じているのか、彼らが何にどう興味を持ち、何をどう重要なことと考えているのか、といったことを外部の人間が知り得るうってつけの材料を提供してくれる。それらは人と自然の関わり合いやその変遷、村や地域の歴史等をテーマとする諸研究、さらには広報・啓蒙といった実践的活動にも十分応用して行ける可能性を秘めている。その具体例として、エコヘルズプロジェクトでもおなじみのサワンナケート県ラハナム村の、これまでお会いした中でも最も尊敬する偉大な歌い手のひとり、メーナーイトーンカム婆さん（88）の歌詞・音源を使う予定である。